

Erienne Lamotte

Le Traité de la Grande Vertu de
Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñā-
pāramitāsāstra), Tome V, Chapitres
XLIX-LII, et Chapitre XX (2^e série),
Louvain, 1980

佐々木教悟

学界待望の『大智度論』のフランス語訳第五冊目がついに出版された。鳩摩羅什が全訳したといわれているのは、『大智度論』百卷中、卷第三十四までで残りは抄訳であるとされている。教授は今回出版の第五巻で卷第三十四までの訳註をすんで終了され、この仕事は完結したかたちとなった。すなわち、『大智度論』卷第三十四の末尾のところ(大正二五、三一四上、第一八行から同中、第一八行まで)の文は、その内容からいって「初品」の結びとなるものであるから、これに対して Samāpti (Conclusion) なる語をあたえつ (p. 236) 同時にこの訳業の結びとされた意図がうかがわれるのである。

おもうに、『大智度論』の研究は、数ある著作の中でも最も心血を注がれたライフワークともいふべきものであり、教授の長年にわたる佛教研究の成果が、この膨大な量をもつ全五巻二四五頁に、ことごとく収められているといつても決して言ら過ぎではない。各巻の章分けや頁数などをあげてみるならば、

(tome)	(chapitre)	(page)	(漢訳原本巻数)	(発行年)
I	I—XV	620	1—10	1944
II	XVI—XXX	621—1118	11—18	1949
III	XXX—XLII	1119—1733	19—27	1970
IV	XLII(suite) —XLVIII	1735—2162	27(承前) —31	1976
V	XLIX—LII et XX (2 ^e série)	2163—2371 2373—2451	32—34 49	1980

各巻にはそれぞれ序文がつけられていて、書物の内容の要項と研究上の諸問題が提示されている。もとより『大智度論』のような、佛教の百科全書的な豊富な内容を有するものをあつかうのであるから、完璧なものをそこに期待するのは無理であるが、それにもかかわらず、これらの序文は、ただ単なる序文ではなくして、フランス、ベルギー学派の伝統を承けている教授の学風をとおして『大智度論』そのものの性格を把握せしめる役割を充分に果たしている。

第二巻目が出たときに、第一巻と第二巻の序文第一卷一八頁、第二卷一七頁(ならびに本文の訳註を仔細に読まれた同学の山口

益教授は、「現代の学界に提出し得る佛典の訳とは、かういふ

ものでなければならぬであらう。」と最大級の讃辭を呈せられたのであった。(E・ラモート教授の大智度論のフランス訳について) 大谷大学佛教学会編『佛教学会会報』第五号(特輯号)昭和二十七年二月、十一頁。この一文は、のちに『フランス佛教学の五十年』昭和二十九年十一月、平楽寺書店刊に再録されている。また第三巻目が出たときに、平川彰教授は、その第三巻の序文が他に例をみない長文(六〇頁)のものであり、しかもその中に教授の三十年にわたる『大智度論』の研究の成果が収められていることに着目して、その序文の内容を、『大智度論』の梵名、作者、引用諸経論の三項に分けて紹介するとともに、本文の訳註について論評された。(E・ラモート教授の『大智度論フランス語訳』第三巻について) 日本印度学佛教学会編『印度学佛教学研究』第十九卷第二号(通卷第三八号)、昭和四十六年三月、九二四頁―九三三頁)。この論評の中で、平川教授は、ラモート教授がいわゆるフランス、ベルギー学派の伝統を承けて、一語一句もおろそかにしない翻訳をされていること、そして漢文を自由に読みこなすと自負する我が国の学者が、早く読むためにかえって問題点を見落してしまうようなことが、本書では取り上げられ、その重要性が指摘されていることなどをあげて、数多く教えられるむねをのべておられる。とくに脚註が充実していて、漢文テキストに出てくる極くわずかな引用文をも見逃さず、梵・漢・パ・チベットにわたって、その出典を調べて出し、さらにそれに関係する諸学者の研究業績をもあげてあり、まことに見事であると言う以外に言いよう

がないとまで述べておられる。

ちなみに、いわゆるフランス、ベルギー学派に関して、その伝統を産み出した学風はいかなるものであるか、またいかなる学者がそこにあらわれ、その伝統をささえていったか、というようなことについては、ラモート教授自らが直接の学問上の師であったド・ラ・ヴァレー・プーサン教授について述べた一文があり(大谷大学佛教学研究室訳「ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授についての略述」佛教学セミナー第3号、一九六六年五月)、われわれはその「略述」によって充分にそのことをうかがうことができる。

さて、第四卷(序文一六頁)、第五卷(序文一一頁)も、ほぼ前三卷に準じたものとなっているから、前述の山口、平川両教授の評価は、そのままこの両卷に対してもあてはめることができる。第五卷は『大智度論』卷第三十二、四縁義からはじまるが、広く四縁(因縁・次第縁・縁縁・増上縁)の義を知らんと欲せば、阿毘曇を学ぶべしと説くのに応じて、教授は冒頭に前置きのノートをかかげて、阿含の經典の所説、有部、『中論頌』、『大般若経』および『大智度論』におけるあつかいをだしている。ここにも教授のアビダルマに対する学識の深さがよく示されている。諸法の如・法性・實際を説くところでは、佛敎の旗じるしとして古来より知られているところの三法印がでてくるが(大正二五、二九七下、フランス訳二八九頁)、『大智度論』では、この三法印は卷二二(大正二五、三二二上)中、フランス訳一三六八頁)

にすでに出ていて、教授は第三巻のその下においてまことに詳細な註記をあたえている。そこには、三法印に関する（そして関連的に四法印〔四法本末〕についても）いくたの典故を調べてそれがしるされてある。しかし『根本説一切有部毘奈耶』巻九（大正二三、六七〇下）に出てくるものはあげてあるが、『根本説一切有部目得迦』巻六（大正二四、四三五下―四三六上）におけるものは注意されていない。この『目得迦』におけるものは、「諸行皆無常、諸法悉無我、寂靜涅槃樂、汝宜於我起淨信心」となっていて、もっぱら信心の発起を勧めめる度合いの濃いものとなっている。阿弥陀佛の思想がでてくるところでは、藤田宏達教授も考察しておられるごとく（『原始淨土思想の研究』三六二頁以下）、現在多方便の論証を原始經典とのつながりの面で理解しようと努力したあとがうかがわれる。『大智度論』における阿弥陀佛に関する所論は、すでに巻四（大正二五、九三上、フランス訳第一巻三〇〇頁、同巻九（大正二五、一二七上、フランス訳第一巻五五六頁）に出てくるが、ここではとくに阿弥陀佛の光寿二無量の徳による衆生済度という、佛の大悲による教化のことが説かれている。佛の大悲が骨髓に徹し云々というような所論に対しては、たんに阿含の經典のみでなしに、『ジャータカ』その他にあらわれたる菩薩の慈悲をあつかう文献に一層の注意がはらわれなくてはならない。この点がすこしくささやかであるようにおもわれる。

巻三十三には、布施、持戒、修定の福処を説くために *Velama*（韋羅摩）など計九つの「本生」があげられるが、ラモート教

授はすべてその所在をたしかめ、脚註の記述に間然するところがない。とくにこの巻には十二部經に関する所論があり、いくたの經名や經文の引用などがあって内容は豊富である。巻三十四には、見佛思想や念佛思想が説かれるが、觀世音菩薩の名を念ずれば厄難を脱する、佛の名を聞いて佛と成る、という利益をあげて般若波羅蜜を学ぶことを勧め、最後の結びのところにおいて（大正二五、三一四上、）すでによく知られている「是故佛以般若為母、般若三昧為父。」ということが説かれている。ラモート教授は、般若波羅蜜は諸佛の母であると説く所論に対して、*Ratnagunasancaya*, XII, v. 1 (ed. Yuyama, p. 49) の *gāthā* に眼をつけて引用し、佛母思想をあつづけるなど *Buddhānā* に関するくわしい註記をほとんどしている。

さて菩提心を發した菩薩は一步一步進趣してゆくことになるが、そのことは『大智度論』では第二「本品」の第二十一「發趣品」の所論にして、巻四十九と巻五十の一部にまたがっている。すなわち、フランス語訳第五卷二二三―二七三頁から終りまでの部分である。最初に *Mahāyāna samprashita*（發趣大乘）ということに関して前置きのノートがかかげられて、菩薩行とその行地の解説がなされている。ついで『大智度論』にしたがって十地が次第を追って示されるが、とくに第二地の下で知恩のおしえを説く『本生經』がバリーリ（*Paṭisa-jātaka*（熊本生）なることを知り、それが *Saṃgahadevavastu*（根本説一切有部毘奈耶破僧事）巻十五、大正二四、一七七上―下）に

出ているところから R. Gnoli の刊本 (II, p. 104-106) を用いてその簡短の梵文の全文を註記している点が注目される。チベット訳の検出はまだなされていないが、佛典をあまねく渉猟し、該博な学識の所有者にしてはじめてなし得ることであろう。「知恩報恩」という語が用いられている。この『大智度論』(卷四十九、大正二五、四一三下)の所論は知恩(Kṛtānata)が大悲の本(mahākaraṇānāta)であり、善業(kusālakarma)を開く初門であることを言わんとするものであり、菩薩の実践行として重要な意味をもつものとかんがえられるのである。教授はその点に格別の配意をされたのであろうか。

さて、ラモート教授にはもう一つの大作である *Histoire du Bouddhisme Indien: Des origines à L'Ère Saka*, Louvain, 1958 があり、教授の佛教学研究が、いかに地についたことの実証的なものであるかが知られるが、その『インド佛敎史』に関しては、筆者はかつて『ラモートのインド佛敎史』に関する業績』(アジア・アフリカ文献調査報告第8冊「言語・宗教」)、アジア・アフリカ文献調査委員会・東京大学(一九六四年三月)の中で詳細

にその内容を紹介し、その研究の有する意義について述べたが、『大智度論』のような広汎な領域の内容を有する文献の研究は、佛敎史に対する理解と知識とがなければ到底なしがたいものといつてよい。ラモート教授は去る昭和五十二年十月に初めての来日を果たされ、同月十八日にわが大谷大学を訪問された。そのときにおこなわれた『大智度論』の研究に関する講演とはほぼ同じ内容の講演が東京大学においてもおこなわれたのであった。そのときの講演の内容は、「大智度論の引用文献とその価値」加藤純章訳『佛敎学』第5号、佛敎学研究会、一九七八年四月)として公けにされているが、その内容を見るならば上述のことが十分に証明できるのである。『大智度論』のフランス語訳註と『インド佛敎史』とは、教授の〈記念碑的二十大作〉であるといわれ

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

en Europe par Jacques May, *Miscellanea Indologica Kiottensia*, No. 2, p. 5, Kyoto University, 1961)。第五卷が刊行されて、この大作が完了した現在において一層そのことを感ずるのである。教授は本年七十七歳になられた筈である。ご健康と今後のご活躍とを切に念じあげる次第である。